



プレスリリース

青木千絵 「孤独の身体」

2018年9月8日（土）～ 9月29日（土）

開廊時間 10:00am ～ 6:00pm

レセプション：9月15日（土）4:00pm～5:30pm



青木千絵, 「BODY 18-3」, 2018, 漆、麻布、スタイロフォーム, H63 x W60 x D100cm/ H24.8 x W23.6 x D39.4in

現代美術艸居では青木千絵個展「孤独の身体」を開催致します。弊廊では初の個展になります。青木は大学時代より一貫して、自分の内側に眠る「何か」と対峙することを作品の根底とし、腰から上が歪み、引き伸ばされ、溶解したようなヒト型の、圧倒的なインパクトの大型の漆造形作品「BODY」を制作してきました。

既に彫刻の制作などを始めていた学生時代の青木は、後の恩師、田中信行の漆の造形作品「Orga」と「心臓を掴まれるような衝撃的な」出会いをはたします。「自分自身が呑み込まれてしまうような」漆の奥行きを覗き見、漆こそが、自分の中にある「何か」と振幅し、「形態だけで表現するにはあまりにも得体の知れない」それを表現し得るものだと考えます。

全ての青木作品の制作は、その「何か」と潜在意識下で対話することを起点として始められます。目を瞑り、自分を殻の中に閉じ込めると、感情は無防備で剥き出しの状態になると言います。その際限の無い闇の中で孤独になるとぼんやりと現れる影、闇に飲み込まれるような不安、逆にそっと包まれて守られているような安心感。「BODY」と



名付けられた一連の作品群は、自分の闇/ 殻/ 潜在意識の中で、孤独の不安と心地よさの狭間に揺れる青木自身を投影しています。

あの滑らかで深い漆の鏡面の制作には非常に手間がかかることは良く知られています。仕上げまでに50近い工程があり、特に作品表面が大きい青木にとっては想像を絶する作業量で、一回の研ぎに三日を要すると言います。完成まで予断の許されない、精神を研ぎ減らす過酷な作業です。ただし、そうして全神経を研ぎ澄まして漆の深層へ没入する工程は、その表面に自分自身を埋め込んでいくために無くてはならないもので、それは他の化学的な塗料とは置換不可能なものだと青木は言います。「漆は、私の作品において、私の精神世界を表現する上で重要な役割を担っているものであり、私は、漆を全面的に信頼し、すべてを委ねているのである」。

本展では、「BODY」シリーズの出発点となった、「BODY - 内と外 -」の再制作を含む、大型作品3点に合わせて、小作品4点、ドローイングから制作した6点を展示致します。

青木 千絵

1981年岐阜県生まれ。金沢美術工芸大学 大学院 博士後期課程 美術工芸研究科 工芸研究領域 漆・木工コース 修了（芸術博士号取得・学長賞）。現在、金沢美術工芸大学 助教。ミネアポリス美術館（ミネアポリス、ミネソタ）、徳島県立近代美術館（徳島）、湖北美術館（武漢、中国）、他収蔵。

青木 千絵「孤独の身体」展は9月8日（土）から9月29日（土）まで
現代美術 艸居 京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2 にて展示
開廊：火～土

お問い合わせは、藤田裕一 info@gallery-sokyo.jp 又は 075 746 4456 までお願いいたします。